文明間対話における女性と青年

ライハナ・アブドゥーラ

※本稿は２０１５年３月22日に日本青年館（東京・新宿区）で行われた特別公開講演会の内容をまとめたものです。

「ネガティブ・イメージを変えたい」

ムスリムの世界と聞いて、自然と思い浮かぶイメージはどのようなものでしょうか。おそらく、長い髭を生やした男性が、イスラームの風刺画に抗議して乱暴に行進している姿があり、その背後に、黒いテントのような衣服を全身にまとった女性たちがコソコソと隠れて動き回っている――そんな中東のイメージがあなたの頭を駆け巡るのではないでしょうか。このようなイメージはほんの一例にすぎないかもしれません。教育のレベルや、それぞれの文化が描きだすイメージの偏狭さによっては、さらに多くの型にはまったイメージをもつ人もいるでしょう。そして、こうしたイメージから抜け落ちているのは、たいてい若い人たちの姿ではないでしょうか。もしかすると、あなたは、家のどこかにとどまって、無理やり愛のない結婚をさせられたり、農業の教育を受けさせられているムスリムの

講師は、イスラーム法の弁護士資格をもち、長年、マレーシアでの女性の法意識の向上に尽力してきた

青年のイメージをもっているかもしれません。もちろん、砂漠とか何十年もの戦争によって破壊された建物の他に、何かイメージできるとすればですが。

いずれにせよ、一般的に、ムスリムの世界のネガティブなイメージは、世界中に残っています。しかし本日、私は、イスラームを信仰する女性としてここに立っています。黒い衣服をまとっているわけでもなく、男性たちによって機能不全の社会の端っこに追いやられ沈黙させられているわけでもありません。皆様に、イスラームの別のイメージ――類型的でありふれたものではなく、多様性のイメージ、共生を求めているイメージをもっていただけることを願って、私はここに立っています。私がこの場にいること、多様な文化、宗教、文明に焦点を当てた、この講演会に出席していること自体が、そのような「共生」の可能性の証拠ではないでしょうか？　いえ、これが何らかの明らかな証拠になることを期待するのは、あまりに安易で、見えすいてさえいるかもしれません。本心ではそうではないことを願っていますが、実際は難しいかもしれません。

ムスリム世界は――もしかすると全世界も――「共生の欠如」の実例にこと欠きません。絶え間ない殺戮、政治の混乱、経済の崩壊、文化的・宗教的不調和があふれています。しかし、こうした事実があるからこそ、今回のような講演会が開催されるのではないでしょうか？　現在そして未来の世代の「共生」の前に立ちはだかる問題を解決するために、私たちは今日ここに集まったのではないでしょうか。

私はムスリムの女性として、他者の見方や世界観に縛られることなく、自分の選んだ信仰や、民族、ジェンダーのすべてが、この現代世界から受け入れられることを望んでいます。そして、同様に、私の信仰が、他の誰かの権利を侵害することがないことを切望します。その人の信仰や民族、ジェンダーがなんであろうと。これはここにいらっしゃるすべての方々の願いかもしれませんが、この願いを現実にするためには、まず相互理解を目的とした集団的な対話の場に参加しなければなりません。だからこそ、前途を開くためには、このようなフォーラムが不可欠なのです。イスラームの代表、そして世界中のムスリム女性を代表して、私が誰であるかを周りに理解してもらうこと、私の同朋の人々の信仰や暮らし方、社会的状況を周りに理解してもらう手助けをすることが私の責務であると思います。そうすることで、私たちが皆、それぞれの経験の中から何か良いことと共通点を見つけ出し、共存する方法を学べるかもしれないと思うのです。

「他者への決めつけ」があれば対話は不可能

ムスリムでマレーシア系シンガポール人の哲学者、サイド・ファリッド・アラタス氏は、共生の問題に対する解決策を次のように示しています。「ムスリムと西洋に対話が必要なのは明らかです。そして、対話を成功させるためには、さまざまな立場の人々が抱いている偏見をなくさねばなりません」と。しかしながら、彼は続けてこう述べるのです。「イスラームについての社会の言説、議論には、明らかにイスラームに対する偏見があり、それが広く示されています。この問題の根本には、人文科学におけるヨーロッパ中心主義があります。このヨーロッパ中心主義がイスラーム

観をゆがめ、それがメディアによって表現されることによって、一般の人々の認識に影響を及ぼしているのです」と。

アラタス氏は、この問題の解決策は「対話」であるとしています。しかし、彼は特定の文明的パラダイムが支配し、他の文明の人々に発言権が与えられていない場合には、適切な対話は可能ではないだろうと考えました。これまでの「対話の失敗」が西洋のせいだというわけではありません。もし相手を指弾したりすれば、共生という目標の実現には逆効果になってしまいます。とはいえ、単刀直入に言えば、さまざまな面で世界が、この支配的パラダイムに影響されてきたことは事実なのです。これには良い面もあったかもしれませんが、その一方で、人々に「西洋の視点」という近視のメガネを通して「他者」を否定的に見ることを許してきました。つまり、西洋の歴史的、文化的背景を基礎にして、ものごとを見るわけです。こうした否定的な見方の犠牲になっているのは、たいてい――つねにとは言いませんが――女性や青年です。西洋のメディアによって作りだされたムスリムの女性や青年のステレオタイプこそ、その実例です。その上、西洋に住んでいる多くのムスリムの女性や青年の実像は、完全に無視されているとまでは言いませんが、しばしば見落とされてしまっているのが現実です。また、私や私の仲間のムスリムの女性たちは、多くの場合、このような場でしか多数の人に話を聞いてもらう機会はありません。

そして、ムスリムが、これまでのステレオタイプから離れて、私たちを見てもらおう、私たちの話を聞いてもらおうとすると、「ムスリムの女性や青年はもはや抑圧されていない」と主張する当のパラダイムによって妨害されてしまうのです。これはなんと皮肉なことでしょうか。もし私たちが抱える問題の解決策である「対話」がこのようにコントロールされているとしたら、いったいどうすれば私たちは前に進めるのでしょうか。こうした対話を始める前に、私たちは、何を基本にどう対話をすべきかを学ばなければなりません。そして、標準的な見方、つまり、ひとつのパラダイムによって

人々の記憶に焼きつけられてしまったステレオタイプから解放されなければなりません。さらに、別の文明のパラダイムがもつプラスの面を学び、周りに教えなければならないのです。

イスラームの伝統は女性・青年を尊重

純粋にイスラームへの信仰に基礎を置く社会にあっては、女性や青年が疎外されているとは言えません。なぜなら、イスラームは、社会の基盤として、伝統的な家庭の建設をとても重視しているからです。そうした家庭は男性一人だけでしっかり作れるものではありません。女性や子どもが、家族の発展や未来に貢献してはじめて、家庭は機能するのです。譬えるならば、鳥は、くちばしと両方の翼を必要とします。これらがなければ、食べることもできませんし、空を飛ぶこともできません。つまりそれは死を意味しているのです。片方の翼でも切り詰められてしまえば、鳥としてまったく機能しなくなってしまいます。籠に入れられて、見知らぬ世界の珍しい生き物のように眺められるしかなくなるのです。ですから、イスラーム文明がもう一度、高く舞い上がるためには、「女性と子どもは文明の発展に貢献する存在である」とする伝統的な見方を、もう一度認める必要があります。かつてのイスラーム社会では、多くの女性の学者、兵士、役人が、そして素晴らしい知識と能力をもった若者たちが、文明の発展に貢献したのですから。イスラーム文明にとって、女性と青年を疎外する伝統を自分たちがもっていると考える必要は、もはやまったくないのです。

イスラーム文明は、誰かにその主張を代弁してもらうのではなく、自分自身が発言することを許されなければなりません。私や、私の子どもたちも、誰かにその声を代弁されるのではなく、自分たちで発言することを許されなければなりません。シリアやガザなどにいる、圧政的な体制と戦うムスリムの青年たちも、彼らの声が誰かに代弁されるのではなく、彼ら自身に発言権が与えられなければならないのです。私たちは、私たち自身が発言することを許されてはじめて、「共生」を可能にするレベルの建設的な対話をすることができるのです。

ところが、かねてからの植民地主義や、外国からの中東への干渉、進行中のパレスチナ問題などに加えて、最近の出来事として、ナイジェリアで婦人や少女を含む二千人近くもの罪のない人々が虐殺されたボコ・ハラム事件などが起こりました。また、コペンハーゲンでの銃撃事件、ムスリムの大学生3人が犠牲となった米ノースカロライナ州の銃撃事件、ムスリム移民に対するドイツでの反対デモ、ジャンムー・カシミールやミャンマーでの人権無視の暴力、「対テロ戦争」などといった出来事は、共生や平和を導かなかったばかりか、世界中で外国人恐怖症を煽り、戦争を挑発することになりました。また、シャルリー・エブド誌への襲撃事件はフランス社会のみならず、世界に衝撃と屈辱感を与えました。そしてその後に残ったのは、西洋ではしばらく見られなかった、強烈なまでの怒りと悲しみだけでした。抗議運動は、路上だけでなく、ソーシャルメディアにも広がりました。人々は、風刺週刊誌の「シャルリー・エブド」本社で亡くなった犠牲者への連帯を示すために、“Je Suis Charlie”（私はシャルリー）と書かれたプラカードを掲げてデモに参加しました。

抑圧された人たち――「彼ら自身の声」を聞け

しかし、これらはもろ刃の剣のようなもので、私たちは今日、こうした過去や現代の事件を大きなきっかけとして、平和と共生について語るために、ここに集ってきたわけです。このような語らいは、事件に巻き込まれた人々や影響を受けた場所に、必要な秩序と人間性、調和を取り戻す助けになると思います。悲惨な事件を正すために欠かせないのは、武器ではありません。対話なのです。

暴力や過激思想がやすやすと生まれてしまう環境。それを私たちがつくり続けるならば、どうやって暴力や過激思想に対抗できるでしょう。過激主義者たちは、抑圧と偽善のもとで、失望といらだちを抱えるあまり、立ち上がらざるをえなくなってしまうのです。対話といっても、一方だけが立場を最大限に認められ、一方だけが声をあげることを許されているとしたら、そんな対話が共生のための解決策になるでしょうか。

もし私たちが、文明間の共生のために対話を活用し

たいのであれば、初めに、そのような対話が可能な状況を作らねばなりません。そのためにはまず、「他者」に対する傲慢な決めつけを取り払う必要があります。私は単に、深く根付いたヨーロッパ中心主義の実践者についてだけ、こう言っているのではありません。私を含めたすべての人間にその必要があるのです。すなわち、私たちは、一緒に行動する前に、まずは互いの違いを受け入れるだけの心の広さをもたなければなりません。私たちが寛容であってはならない相手は、ただ「他者を支配しようとする者」だけなのです。

「多文化主義の模範」を目指すマレーシア

さて、こうした「他者への決めつけ」を取り除いたとしても、後に残る「空洞」を埋める必要があります。この空洞を埋めることができる唯一のものは「多文化主義」の思想です。多文化主義という言葉の使われ方としては「多様な文化をもつ社会を表現する。同時に、文化の多様性を守ることを目的とした一連の政策に関連して使われる場合もある」[1]とされています。ですから、私は現代の世界、特に東南アジアとその最も近い隣人であり協力者である日本での多文化主義の実践や経験に着目することが大事だと思います。そして、私が生まれ育ち、その大部分を知っているマレーシア以上に良い例があるでしょうか。この点については、パトリシア・マルティネスも「マレーシアは、多様性とともに生き、それを成功させているモデルケースである」[2]と語っています。もちろん、多文化主義を推進していようといまいと、どんな社会においても何かしらの課題はあるものです。しかし、この地球共同体を平和と共生へと導いていくためには、多文化主義にまつわる課題に向き合うほうがましであることは明らかです。

「宗教がからむ紛争は、より無慈悲になる」

マレーシアにおいては、文化、言語、民族、そして最も肝要である宗教と、あらゆる分野において多文化主義が存在していると言えましょう。しかし、なぜ宗教が最も肝要なのでしょうか。それは、世界のほとんどの人にとって、宗教的なアイデンティティーこそが

最も胸深く抱きしめられているものであり、それゆえ最も敏感にならざるをえないことだからです。

次のような指摘があります。

「北アイルランドや、中東、スリランカ、インド、ボスニア・ヘルツェゴビナなどの紛争を見れば、そこでは互いに異なる宗教伝統が人々を駆り立てている。宗教が、戦争や暴力を招く衝突の要因のひとつと見なされる理由は、この事実を見れば明白であろう。……闘争理論を提唱した先駆者の一人であるルイス・コーザーは、次のように示唆している（Lewis Coser／1956）。『宗教的なイデオロギーが絡んだ紛争は、他の要素に起因する紛争に比べて、より敵愾心が猛烈となり、より暴力的になりがちである。紛争中の宗教グループにおいては、個人という要素が消えて、自分のことをそのグループを体現した存在としてとらえるようになる。そうした場合、彼らの行動はしばしば『過激』で『無慈悲』になりがちなのである』と」[3]

これらのことを踏まえると、宗教というものを、共生を実現するための主要な要素とし、焦点としなければならないと思います。こんな指摘があります。「もしも宗教が、不寛容や紛争の原因ではなく、平和維持のための力になるべきであるのなら、私たちは『宗教上の他者』との関係を新しく築き上げることを考えるべきでしょう」[4]。むろん、過激主義やセクト主義を刺激している要因は宗教自体ではありません。そうした社会の負の部分を主唱しているのは人間自身にほかなりません。それでも特に東南アジアにおいては、宗教は人間のアイデンティティーの芯にあって、その人を動かしている力であると見なされています。

しかしながら、ある宗教グループに所属する全員を（あいつは○○教徒だと）十把ひとからげにして、他と分断するために宗教を利用するようなことは間違っています。さまざまなグループ間の対話に焦点を当てた取り組みは、それぞれのグループの間の微妙な差異を理解し、その具体的な相違点や類似点を理解するために使われなければなりません。そうすることによって、あらゆる衝突や不和の危険を回避できるのです。これは、2011年の国連決議16／18とも一致しています。

この決議は、「イスタンブール行動計画」とか「ラバト行動計画」として知られていますが、そこには、すべての国家が「宗教や信念に基づく人々に対する不寛容、否定的ステレオタイプの押しつけ、烙印を押すこと、差別、暴力の煽動および実際の暴力」に対処する取り組みを実施すべきであるとあります。また、国連決議は、すべての国家がこの目標に向けた政策や法律を制定することを奨励しています。(5)

皆様、マレーシア政府は、特に1969年5月13日に発生した衝撃的な出来事――マレーシアでの民族衝突事件――の後に、多文化主義の政策を実施しようとしてきました。最初の施策は国家統一局の設立であり、この事件の直後に作られました。現在は国家統一諮問委員会となっています。

続いて、代表的なプログラムがいくつか始まりました。そのうちのひとつに、「イスラーム・ハドハリ（文明的イスラーム）」があります。これは、多元的な社会の要求に応えられるよう、イスラームを現代化することを意味しています。もっと近年の施策では、現在のナジブ・ラザク首相が推進している「サトゥ・マレーシア（マレーシアはひとつ）」や「ワサティーヤ（イスラームにおける穏健主義）」があります。どちらも、異なる文化や宗教間の衝突を解消することを目的としており、そのために多元的マレーシアという共通のアイデンティティーを強調しています。その他の施策で触れておくべきものに「ルクン・トゥタンガ」の導入があります。これは、イギリスとアメリカの「ネイバーフッド・ウオッチ（住民の連帯と地元警察の協力によって防犯を目指す地域組織）」をモデルにした住民自治組織で、地方や多民族地域の犯罪率を減らすことに役立っています。もうひとつ別の取り組みに、統合幼稚園の設立があります。これは、民族や文化の融合というものを、ごく幼いうちから染み込ませていこうというものです。

マレーシアには、政治的・経済的な対立はまだ残っていますが、これらの取り組みのおかげで、宗教的・民族的な暴力に関しては、ほとんど見られなくなりました。これらの実践は、地球的規模で見てもマレーシアが豊かな多文化性と可能性をもっていることを示し

ていると思います。

「力関係」が不均衡では対話できない

このような模範を示すためには、宗教間対話をするための「方法」の導入に積極的でなければなりません。ムハンマド・アブ・ニマーは、具体的ないくつかの方法を提示しています。[6] 第1に、疎外されている者と、より権力や立場がある者の間のバランスが保たれなければいけないと言います。西洋での最近の例としては、カナダとアメリカでの出来事があります。どちらも、イスラーム教徒の女性がその地の法的システムによって社会的にはじき出されてしまった事件です。彼女たちは「法廷で、宗教的な衣服を身に着けてはならない」とされ、そのため裁判所で自分の主張が聞いてもらえなかったのです。そのうちカナダのケベック州での事件は、ラニア・アルアローという女性が、「裁判所の服装規定に違反するから、ヒジャブを脱ぐように」と裁判官に言われ、彼女が拒否すると、審問は中止されてしまったのです。[7] ほぼ同時期に、同様のケースがアメリカのジョージア州でも起こりました。リサ・バレンタインという女性は、裁判官から「ヒジャブは裁判所にはふさわしくない」と言われ、それを脱ぐようにという裁判官の要求に従わなかったため、拘束され、10日間留置されました。[8]

権力のバランスが保たれずにこのような問題が起きる中で、私たちはいったいどうやって「対話」できるというのでしょうか。私は、宗教間対話について語る以前に、いわゆる多文化社会において、異宗教をもつ人々にも平等の権利が与えられなければならないと思います。そして、そうした人々の宗教について、公的な場で法的強制によって干渉されるようなことがあってはならないと思います。権力をもつ者は「あなたが人にしてもらいたいように、あなたも人にしてあげなさい」との黄金律を理解すべきです。そしてこの教訓は、本日のような一般参加型の対話や文化交流の場で、強調され、奨励され、焦点とされる必要があるのです。

ムハンマド・アブ・ニマーは第2の方法として、異宗教間の対話では、双方の類似点と相違点がくわしく検証される必要があるとしています。互いの対立する

部分と共存できる部分の性格を完全に理解するためです。こうした理解があってはじめて、双方の共通の目標が達成できるのです。[9]

彼は、第3に、双方を共同作業に組み入れていく必要を挙げています。その際に、（第2項で確認した）両者の共通項を利用して、社会の中で生産的な作業や方策を推進できるはずです。第4には、対話が生まれるような柔軟な「場」が必要だと書いています。この場というのは、誰にとっても不便でなく、個人も団体もみなが居心地がよいと感じるものでなければならないとしています。5番目に彼が提唱したのは、過去の傷を癒していく対話です。そして最後に、こうした一連の対話は、宗教的な要素がない場所で行われるべきであるとしました。他の信仰で使われる宗教的形象に敏感に反応する人々がいますから、その人たちの気持ちを傷つけないためです。[10]

こうした方法や環境整備は、すでにマラヤ大学文明間対話センターや、創価学会インタナショナル、ウィーンにあるアブドラ国王宗教間・文化間対話国際セン

講演会場は終始、和やかな雰囲気に包まれて。質疑応答では、マラヤ大学で学んだという参加者がマラヤ語であいさつするシーンも

ター、英国のトニー・ブレア・フェース財団など多くの団体が実行していますが、もしも私たちの間で行われ、さらに広げて推進されていったならば、それは世界的な成功を収めることができるのではないでしょうか。

女性と青年の社会参加をもっと

皆様、私たちは、これまで「他者」の疎外に焦点を当ててきましたが、ここで、疎外されてきた2つのグループ、「女性」と「青年」に着目したいと思います。女性と青年というのは、私たちが、それぞれの社会や文化の中で、彼らの可能性を開花させようと強く主張すれば、こうした対話に恩恵をもたらしてくれる存在です。国連安保理決議第1325号（2000年）には次のようにあります。

「紛争の予防と解決、および平和構築における女性の重要な役割を再確認し、平和と安全の維持と促進のためのあらゆる取り組みへの女性の平等な参加や全面的な関与と、紛争予防と解決に関わる意思決定における女性の役割を高める必要を強調し……」[11]

第2次世界大戦後の日本社会に注目すれば、この国連決議が「紛争後の社会が成功するには、すべての人々、とりわけ女性が平等に扱われなければならない」と教えてくれていることは明白です。このことからすると、私たちは、戦後の社会で日本の女性がどのような体験をしてきたのか、また、日本の女性が地域や国際社会において活躍するために日本社会がどのような手助けをしてきたのかに着目すべきでしょう。

私は、マレーシアも同様の目標をもつべきだと思います。マレーシア社会は、女性が対話や市民としての責任遂行に、より積極的になって生きられるよう、そのための対策を施しながら、長い道のりを歩んできました。例えば、マレーシアでは、公共の交通機関その他の場所で男女が接触するというデリケートな問題に配慮して、女性専用の車両などのサービスを提供しています。また、大学に通っている女性の割合が、マレーシアは他の多くの国に比べて高いのです。これを実現するには長い時間がかかりましたし、非常に誇らしい

ことです。また、マレーシア社会には、積極的に発言する女性のグループがいくつも存在します。彼女たちは、男女平等に関して、とりわけ家族法に関してのロビー活動を堂々と続けています。さらに、何人かの女性は、政治の分野でとても強力なリーダーになっています。

日本とマレーシアは、男女平等ならびに男女の公正な扱いという面では、大きな成功をいくつか収めたかもしれません。しかし私たちはこれからさらに前進し続けなければなりません。市民としての活動や文明間対話に女性がもっと参加する必要があるのです。女性がこれらに組み入れられてこそ、社会はもっと健康になり、よりよい未来を開いていけるからです。また、多くの国際紛争を解決するためにも、より多くの女性が平和構築のための折衝会議に参加する必要があります。社会の未来にとって女性は不可欠の一部ではないでしょうか？　女性なしには、青年を育てることもできません。家族を作ることもできなければ、安定した社会も作れません。ですから、この対話に女性たちを参加させる取り組みを、より増やしていかねばなりません。そして男性中心の舞台で女性が安心して参加できる工夫を重ねる必要があるのです。

宗教間対話の方法については、先にもいくつかお話ししました。まず双方の力関係にバランスが保たれていることを確かめておく必要があります。また、双方が互いを深く理解していること、抗議や不平が解消できていること、そして対話の形式に互いが納得しており、どちらか一方を疎外していないこと。これらを確認しておかねばなりません。言い換えれば、話し合いを始める前に、互いの間に尊敬がなければならないのです。「しゃべる前に、まず敬意を示す」――これこそが、今、世界中で悲しいまでに欠落している一点なのです。

「幸福すぎて閉じこもる」若者たち

では、青年についてはどうでしょうか。最近の若者は、外の世界にも将来にも目を向けようとせず、非常に狭い世界で生きていると言われています。日本語では「内向き」という言葉で知られています。この言葉は、

経済的、社会的なストレスから将来への望みが見出せず、社会参加できない若者を表しており、負のレンズを通して見たレッテルなのです。ところが、社会学者の古市憲寿（ふるいちのりとし）氏は、近年（2014年）、こう指摘しています。[12]――この現象は、国外に出ることへの無関心や周囲の世界への興味の欠如から来ているのではなく、高いレベルの「現状に対する幸福感」を反映しているのかもしれません。そしてそれは、日本全体の豊かな社会経済状況が生んだものなのです、と。

つまり、このような「社会に参加できない若者」は、単に満足しすぎているということです。彼らは将来のために自分の可能性を開花させていこうとする理由が見つからないのです。もしかしたら、日本は、このような幸福な若者が外に目を向け、目標を探すよう手助けできるかもしれません。そうすれば、彼らは、その幸福感を他の世界と分かち合うことができるかもしれません。そうなれば、彼らは国際社会にとっても価値のある存在になれるではありませんか？　日本の若者たちは、他の人々にも幸福を分けたいと思うべきではないでしょうか？

マレーシアにも、閉じこもりがちの若者がいるように見えます。彼らは自分たちのことを、目的も社会との関わりもほとんどない存在と思っています。暴走族に加わる若者の問題もあります。彼らは、自分たちは社会に出るには不十分で、世間から外れた存在だと考えているために、犯罪に手を出してしまうのです。マレーシアは、共生の実現を目指し、異文化間、異宗教間の争いをなくすために長い道のりを歩んできました。しかしながら、このプロセスに青年をどう巻き込んでいくかという課題には、まだ良い方法を見出せていません。マレーシアと日本は、いわゆる「未来のリーダー」と呼ばれる自国の青年たちが、今後、市民として社会と関わっていくようにするため、何ができるでしょうか。そうした問題に対して、互いに、どのような手本を示していけるでしょうか。

マレーシアと日本は、世界のためにたくさんの果実を提供できる肥沃な大地をもっています。両国の社会が、どのような実を実らせることができるのかを、国

際社会に――東南アジアや太平洋地域だけでなく、全人類のために示す時が今、来ているのかもしれません。しかし、それをするにはまず、女性や青年のコミュニティと関わりをもって、対話のプロセスに彼らが参加できるようにしてあげなければなりません。

私は、可能であれば、政府と民間企業が全面的に支援する新しい組織があればよいと思います。つまり両国の社会における女性と青年の社会参加にすべての焦点を当てた組織の設立を提案したいのです。ここでの参加というのは、文明間対話や宗教間対話についてだけでなく、市民の責務に関しての参加のことです。そしてもうひとつ、この目標の達成のために、素晴らしいふたつの国家の間で共同プロジェクトが進められることを提案したいと思います。

あるいは、今年の「国際女性デー」（2015年3月8日）を機に協力することで、この分野での新たな躍進の季節をスタートさせられるかもしれません。国際女性デーは、かつて――といっても現在にも関連のあることですが、テーマとして「女性のエンパワーメント、人類のエンパワーメント：描いてみよう！」を掲げていました。日本とマレーシアの私たちも、この後に続いていけるのではないでしょうか。そのためには、それぞれの社会の可能性を駆り集めて、女性をエンパワーしなければなりません。それができれば、世界の人々が「マレーシアと日本では、男女間の平等と公正が実現しているのだ」と考え、その姿を生き生きと、まぶたに思い描けるようになることでしょう！　そして私たちは、（両国の代表が集った）今日の講演会が実り多かったという事実からも、何かを学べることでしょう！

最後に、この講演会の主催者の温かいおもてなしに感謝し、「平和と共生に不可欠の対話」に協力してくださるお心に深く感謝して、私の話を終わりたいと思います。本日、こちらにお招きいただき、同じ願いをもった皆様とひと時を過ごせましたことを大変に光栄に思います。

近い将来、対話と平和のための私たちの共同の取り組みが成功の果実をつけますように。そしてマレーシアと日本が、それぞれの社会における「他者」のため、

疎外された「女性」や「青年」のために、国際社会で「対話の手本の国」となりますように。皆様、対話を通じて、共生を目指しましょう。そして、対話を通じて世界に橋が架けられるよう、より多くの女性と青年を参加させてまいりましょう。

※　※　※

【質疑応答（趣意）】

〔質問者A＝男性〕日本では女性はかなり社会で活躍しており、その関係で、家庭をもたない、もしくは子どもを産まない女性も増えています。社会的な問題の対話にもっと積極的に対応すべきなのは、日本ではむしろ男性のほうではないかと思うのですが。

〔講師〕私が「女性が取り残されている」と申し上げたのは、特に紛争解決の場や平和構築をする過程においてです。そうした場で女性が積極的に採用されていないということです。そのことが遠因となって「国連安保理決議1325」（女性・平和・安全保障に関する国連安保理決議）も出されたわけです。21世紀になったにもかかわらず、世界の様々な紛争地域における解決の交渉のテーブルに女性が少ないのです。

〔質問者B＝女性〕先ほど先生は、日本の青年は内向き指向であるという点に触れられました。実際に日本に来られて、日本の青年に対してもたれた印象と、彼らにどういう期待をされているかをお聞かせください。

〔講師〕確かに、非常に積極的に国外に向けて活動している青年が日本に多くいるということは存じ上げています。また、宗教間対話・文明間対話といった場で活躍する青年もいると思います。しかし、その一方、未来に何も希望がもてないと言っている青年たちもいます。社会の中で積極的に活動できるエネルギッシュな青年が、もっともっと育ってほしいと願っています。特にこのような対話の場、フォーラムのようなところに、より多くの青年が参加することを期待しています。

〔質問者C＝男性〕対話する上で偏見があってはならないと言われました。しかし、新聞・テレビなどのメディアでは、表現が偏見に満ちているとのことでした。この話で私が思い出したのが、２００１年のアメリカで起きた同時多発テロです。この時、私はマレーシアの大学に留学中でした。テレビでは、欧米ルートの情報とイスラーム圏からの情報の両方が流れていました。その時、もし自分が片方の情報にしか接していなかったら、別の考え方もあるんだということに気づくのが難しいのではないかと思いました。どうすれば、それに気づけるかについてお聞きしたいと思います。

〔講師〕私たちもメディアから恩恵を受けているわけですし、メディアの報道を止めるということはできません。ところが、メディアでは、目を引くことやマイナス・イメージのことのほうが大きく伝えられがちです。例えば、人が馬に乗っていてもニュースにはなりませんが、馬が人間に乗っていれば、これは大きなニュースになります（笑）。しかし、いつもそんなことが起こっているわけではありません。ですから必要なのは、プロフェッショナルなメディアです。つまり、プロフェッショナルにニュースを選択し伝えるメディア、重要な真実を偏見なく伝えるメディアが必要なのです。特に青年のあいだではフェイスブックやツイッターなどのＳＮＳが利用され、そういうところでさまざまな情報が流されています。私たちはその情報の中に、その国では馬が人間に乗っているというような、事実でないニュースが垂れ流されていないか、真実がきちんと伝えられているかどうかをチェックすることが大事だと思います。

注

（1）http://www.iep.utm.edu/multicul/を参照。

（2）Martinez, Patricia. “A Case-Study of Malaysia: Muslim-Christian Dialogue and Partnership, Possibilities and Problems, with Suggestions for the Future,” *Dialogue of Civilisations and the Construction of Peace* (Kuala Lumpur: University Malaya Centre for Civilisational Dialogue, 2008), p. 111.

（3）Ciliers, Jaco. “Building Bridges for Interfaith Dialogue,” *Interfaith Dialogue and Peacebuilding*. (Washing-

ton, D.C.L: United States Institute of Peace Press, 2002), pp. 48-47.

(4) Pui-Lan, Kwok. *Globalization, Gender, and Peacebuilding: The Future of Interfaith Dialogue*. (New York: Paulist Press, 2012), p. 29.

(5) "Human Rights Council: States must implement resolution 16 18 and Rabat Plan of Action," at http://www.article19.org/resources.php/resource/37505/en/human-rights-council:-states-must-implement-resolution-16-18-and-rabat-plan-of-action

(6) Abu-Nimber, Muhammad. "The Miracles of Transformation Through Dialogue: Are You a Believer?" *Interfaith Dialogue and Peacebuilding*. (Washington, D.C.: United States Institute of Peace Press, 2002), p. 21.

(7) Qureshi, Amna. "A hijab is perfectly suitable attire for a courtroom" *COMMENTARY* 2 Mar 2015, at http://www.thestar.com/opinion/commentary/2015/03/02/a-hijab-is-perfectly-suitable-attire-for-a-courtroom.html

(8) "Georgia judge jails Muslim woman for wearing headscarf to court" *The Guardian* http://www.theguardian.com/world/2008/dec/17/georgia-headscarf-court-room-rollins

(9) 前掲・注6、22–23ページ

(10) 前掲・注6、23–26ページ

(11) http://www.un.org/womenwatch/osagi/wps/publication/Chapter1.htm
邦訳は、http://ajwrc.org/1325/1325-trans-AJWRC.pdf を参照。

(12) Furuichi, Noritoshi. "The fragile happiness of Japan's 'insular'" *East Asia Forum* 17 September 2014, at http://www.eastasiaforum.org/2014/09/17/the-fragile-happiness-of-japans-insular-youth/

(Raihanah Abdullah ／マレーシア・マラヤ大学人文学研究クラスタ副院長・同大学文明間対話センター前所長)